



ごん狐 新美南吉

「うわあめ
すと狐め」
と、どなり
たてまし
た。ごん
は、びつく
りしてとび
あがりまし
た。うなぎ
をふりすて
てにげよう
としました
が、うなぎ

ANTENNA HOUSE

ほら穴の近くの、はん [#「はん」に傍点] の木の下で
ふりかえて見ましたが、兵十は追っかけては来ませんでした。

ごんは、ほっとして、うなぎの頭をかみくだき、やつとはずし
て穴のそとの、草の葉の上のせておきました。

十日《とおか》ほどたつて、ごんが、弥助《やすけ》というお百姓の家の裏を通りかかると、そこ、いちじくの木のかげで、弥助の家内《かない》が、おはぐろをつけていました。鍛冶屋《かじや》の新兵衛《しんべえ》の家のうらを通ると、新兵衛の家内が髪をすいていました。ごんは、

「ふふん、村に何かあるんだな」と、思いました。

「何《なん》だろう、秋祭かな。祭なら、太鼓や笛の音がしそうなものだ。それに第一、お宮にのぼりが立つはずだが」

こんなことを考えながらやってくる、いつの間《ま》にか、表に赤い井戸のある、兵十の家の前へ来ました。その小さな、こわれかけた家の中には、大勢《おおぜい》の人があつまっています

「兵十のお母は、床《とこ》について、うなぎが食べたいと言ったにちがいない。それで兵十がはりきり [#「はりきり」に傍点] 網をもち出したんだ。ところが、わしがいたずらをして、うなぎをとって来てしまった。



だから兵十は、お母にうなぎを食べさせることができなかった。そのままお母は、死んじゃったにちがいない。ああ、うなぎが食べたい、うなぎが食べたいとおもいながら、死んだんだろう。ちよつ、あんないたずらをしなけりゃよかった。」

ごん狐 新美南吉



ANTENNA HOUSE

「何《なん》だろう、秋祭かな。祭なら、太鼓や笛の音がしそうなものだ。それに第一、お宮にのぼりが立つはずだが」

「ふふん、村に何かあるんだな」と、思いました。

十日《とおか》ほどたつて、ごんが、弥助《やすけ》というお百姓の家の裏を通りかかると、そこ、いちじくの木のかげで、弥助の家内《かない》が、おはぐろをつけていました。鍛冶屋《かじや》の新兵衛《しんべえ》の家のうらを通ると、新兵衛の家内が髪をすいていました。ごんは、

ごんは、おねんぶつがすむまで、井戸のそばにしゃがんでいました。兵十と加助は、また一しょにかえていきます。ごんは、二人の話をきこうと思って、ついていきました。兵十の影法師《かげぼうし》をふみふみきました。

お城の前まで来たとき、加助が言い出しました。

「さっきの話は、きっと、そりゃあ、神さまのしわざだぞ」

「えっ？」と、兵十はびっくりして、加助の顔を見ました。

「おれは、あれからずっと考えていたが、どうも、そりゃ、人間じゃない、神さまだ、神さまが、お前がたった一人になったのをあわれに思わっしやって、いろんなものをめぐんで下さるんだよ」

「うん」

「ごんは、へえ、こいつはつまらないなと思いました。おれが、栗や松たけを持っていつてやるのに、そのおれにはおれをいわないで、神さまにおれをいうんじやア、おれは、引き合わないなあ。」

「うん」

「そうだとち。だから、まいにち神さまにおれを言うがいよ」

「そうかなあ」

